

- 26) 術前の画像診断では描出できず、選択的カルシウム動注負荷後肝静脈採血法(ASVS)により正確な局在診断がなされたインスリノーマの1切除例

杉本不二雄・関矢 忠愛  
 齊藤 六温・植木 匡(厚生連刈羽郡総合病院 院外科)  
 内藤 哲也  
 平田 明・湧井 一郎(同 内科)  
 片桐 尚  
 木村 元政・森田 哲郎(新潟大学 放射線科)  
 五十嵐俊彦(厚生連病理センター)

症例は49歳の男性。内分泌学的にインスリノーマと診断されたが、画像診断上、膵に病変を指摘できなかった。ASVSは、脾動脈根部～大腸動脈起始部の間のみで陽性であった。開腹所見では、膵体部に直径1.5cmの腫瘍を認め、その解剖学的位置関係はASVSの所見と完全に一致した。腫瘍核出後、血糖値は上昇し、IRI迅速測定ではFajans' indexは正常化した。病理組織学的には良性のインスリノーマと診断された。

- 27) 持続的血液濾過透析(CHDF)により救命し得た重症胆管炎の3例

北見 智恵・清水 武昭(信楽園病院)  
 佐藤 攻・長谷川 潤(外科)

重症胆管炎は現在でも致死率の高い疾患であり、的確な胆道ドレナージと適正な抗菌剤の選択が治療の柱である。一方、近年 Systemic Inflammatory Response Syndrome (SIRS) に対する治療として CHDF が注目されている。CHDFは腎補助としてのみならず、血液中に流出した過剰なメデイエーターの除去、組織酸素代謝の改善、間質浮腫の除去による呼吸機能の改善などの点から、SIRSに陥った重症患者管理に有効かつ不可欠な治療法と考えられる。今回我々はDIC、MOFを合併した総胆管結石症2例と慢性膵炎1例の重症胆管炎に対し、CHDFを施行し救命しえた症例を経験したので報告する。

- 28) 新潟大学医学部における成人間生体部分肝移植3例の経験

新潟大学肝移植チーム

田中 絃一・阿曾沼克弘(京都大学医学部 移植外科)

新潟大学では第一外科および第3内科を中心とした生体部分肝移植プログラムが、2月16日の倫理委員会にて承認され、この3月に3例の成人肝生体部分肝移植を経験することができた。これらPBC1例と2例の亜急性型劇症肝炎症例の経過について報告する。

## 第20回新潟乳癌研究会

日時 平成11年7月24日(土)

午後2時～

会場 新潟大学医学部

有任記念館 2F 大会議室

### I. 一般演題

- 1) 新潟県におけるマンモグラフィを導入した乳がん検診の体制づくりについて

姉崎 静記(新潟県村上保健所)

我が国における老人保健法による乳がん検診も施行後12年を経過した。

昨年3月に厚生省はがん検診の有効性等に関する報告書を発表した。これによると現行の方式による乳がん検診では有効性を示す根拠は十分でないが、マンモグラフィによる検診は有効であるのでマンモ導入の早急な対応が必要と結論している。

我が国でもマンモ導入による乳がん検診では、良好な成績が報告されている事より、幾つかの地域でこの検診が開始されている。

新潟県でも平成10年6月に新潟県医師会がん対策委員会の小委員会としてマンモを導入した乳がん検診の検討会が発足し、新しい検診方式を導入した検診体制実施の動きが始まった。

現在までに3回開催した小委員会の議決事項と今後の検診体制整備の取り組みについて報告した。